◆連載

いま留萌むかし 第二十五話

●庄内藩のルルモッペ領有

安政元年（一八五三）、江戸幕府はアメリカと日米和親条約を締結し、開国に踏み切った。この年、蝦夷地には箱館奉行を置き、翌年蝦夷地を直轄とし、仙台、秋田、南部、津軽、松前の五藩に蝦夷地の警備を命じた。更に安政六年の九月には仙台、会津、庄内、秋田、南部、津軽の六藩に対して蝦夷地の分割領有を命じ、十一月には領有地と警衛地が各藩に示された。このうち、庄内藩には西蝦夷地のうち、ハママシケ、ルルモッペ、トママイ、テシオ、テウレ、ヤンゲシリが領地、ヲタスツからアツタまでが警衛地として定められた。

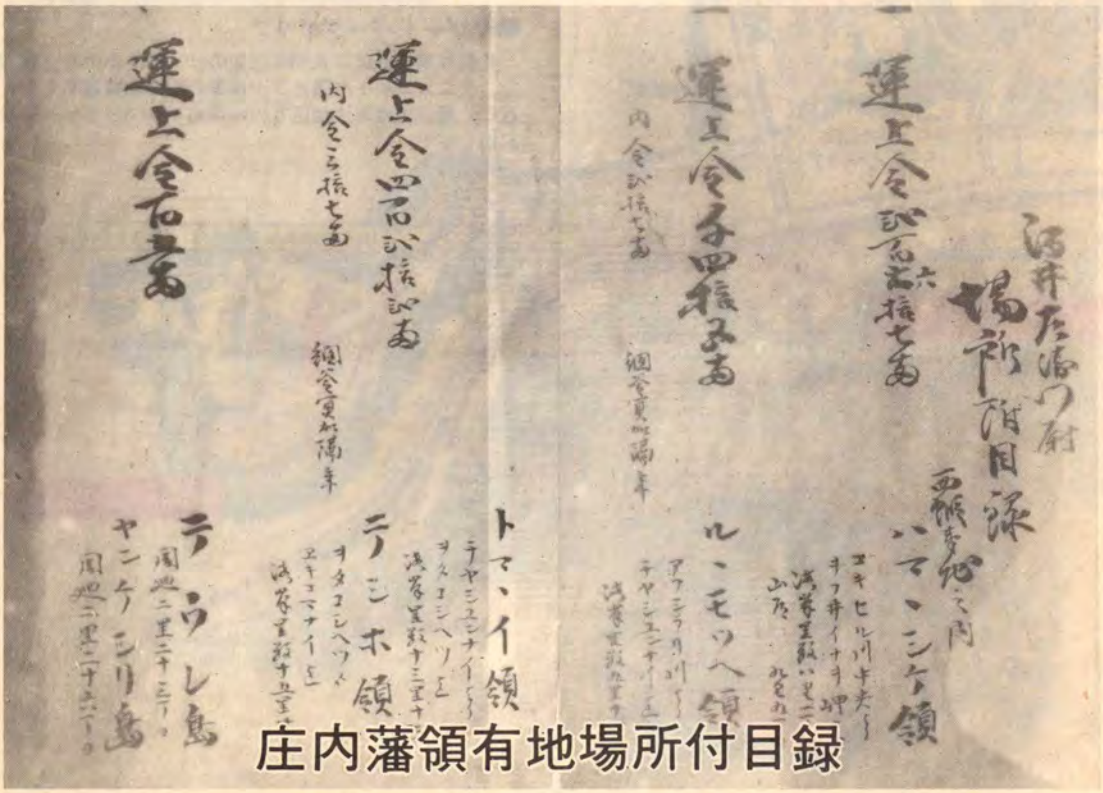
翌万延元年（一八六〇）の六月に事務引継ぎをおえ、元陣屋をハママシケ、脇陣屋をトママイ、出張陣屋をルルモッペに置くことにした。ルルモッペには、郡奉行代官高木丹吾以下足軽、諸向役人など二十三人が配置された。庄内藩はこの蝦夷地領有に対して開墾移住を推進し、永住人口を増やしてゆく政策を採り、積極的に庄内から蝦夷地への移住を奨励している。

当時の蝦夷地は農業に比べて漁業は著しく発達していたが内陸部の開拓はほとんどなされていなかった。漁業にしても増毛以北の出稼ぎが許可され、出稼ぎが増えたといっても、万延元年の時点でルルモッペで百十七人を数えるに過ぎなかった。それも漁期を終えると本州に帰るというものであった。このため庄内藩では蝦夷地の領地を経営する上で領民の定住が必須条件であると考え、万延二年一月、二月移住農民を募集し、三月、四月蝦夷地への移住を開始している。

ハママシケの元陣屋は万延元年に出来上がり、トママイの脇陣屋は文久三年に完成している。これから考えるにルルモッペの陣屋はこの間に完成していたものと思われる。ルルモッペの陣屋跡は現在の春日町の奥、マサリベツにあったといわれ、庄内藩が引き揚げた後、明治新政府によって、留萌支庁の官舎として使われたことが知られている。

ルルモッペでの庄内藩の領地経営は漁業に関しては従来通り栖原家の場所請負を継続させ、農業移民で内陸部の開拓を進めるということであった。そのために、ルルモッペの賢別村、茅原村に田畑約三町歩を開いた。そして、七反三畝の水田で稲作の試作を行っている。その作付け品種は白髪早稲、会津早稲、宝早稲、極早稲、四拾日早稲、白米早稲、沢田早稲等の早稲種で、開拓当初は気候に適する品種の選択のためいろいろなものが栽培されたことがわかる。しかし、稲作はあまり好結果は得られなかったらしく、その後は雑穀中心の畑作へと方針を変えた。

このような、本格的なルルモッペの開拓も慶応三年（一八六七）の大政奉還、王政復古、それに続く戊辰戦争と日本史の流れが変わる中で、庄内藩が朝敵となり、慶応四年四月五日蝦夷地からの総引き揚げとなるのである。



庄内藩領有地場所付目録